

なが
流された岸村 志摩村の言い伝え（鳥井町）



むかし、春日神社（鳥井町）が御板部郷十五か村の総社であったころ、その末社の桜鬼社がありました。

桜鬼社には桜鬼大明神が祭られていて、御尺代（神選田）に附属されていたのは、鳥井、下司、当田、熊田、有定、岸、志摩の七か村でした。なかでも岸村、志摩村は桜鬼社の馬場通りの近くにあったので、村人たちは田や畑へ行くのに桜鬼社の前を通りました。

「きょうは、大根にこやしをやるう。」
「きょうは、田んぼにこやしをやるう。」
と、お百姓さんたちが人糞を田こけ（肥料桶）に汲んで天びん棒でエツチラ、オツチラ桜鬼社の前

まで来ると、どういいうわけか田こけがひっくり返ってしまいます。

神様のいたずらでしようか、神様のおとがめでしようか、お百姓さんたちは困ってしまいました。そこで村人たちは相談して、桜鬼社の御神体をひそかに取り出し

「神様、うらら（私たち）は何も悪い事はしておらん、あまりにいたずらが過ぎます。このままではうららはおまんまが食べません。どうぞお許し下さい。」

と言つて御神体を日野川へ流してしまいました。それから間もなく、康安元年（一三六一年）六月十八日の日の刻に大地震がおき、大雨が降つて大洪水になりました。そ

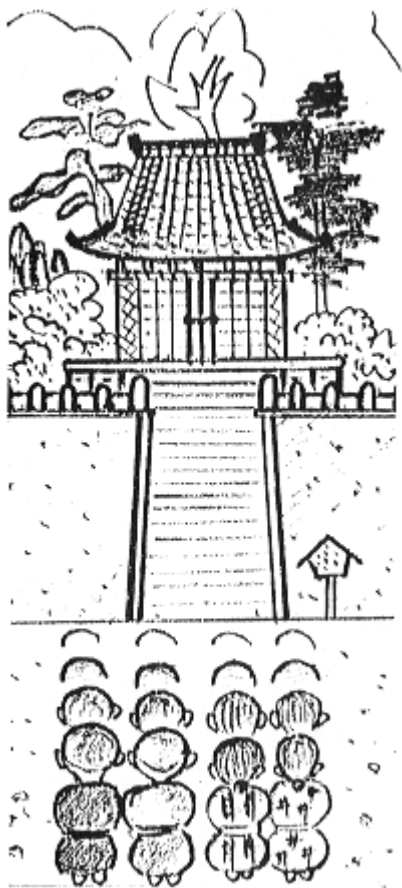


して日野川の流れが急に変わり、岸村と志摩村を一呑みにしてしまいました。

この大洪水のことが『春日神社口伝』に、「人家断絶せり」と記されています。

鳥井町に人たちは、びつくり仰天、恐れおのきながら、

「神様、うらはは神様を大事にせんす。どつぞうららの村をお守り下さい。」



と言って、こべんたま（額）をべと（土）にひつつけて平あやまりにあやまりながら、お米や野菜をお供えて村中総出でお願いしたと言っことです。

鳥井町には、今でも桜鬼田という地積が残っています。田の構造改善の折りに、その土地から土器の破片がたく山出土したと言っことです。